

暗い場所で僕は手足も羽も、触角も失っていた。

汚れた空気の中で粘液にまみれ、芋虫のような体を自在に蠕動させ、頑丈な口器で何かを噛みしめ呑み込んでいる。これが本当に僕なのか？ だけど、そんな状態の自分に、なぜか満ち足りたものを感じている。次第に周囲が明るくなる——だけど、白々と輪郭のぼやけた物の重なりが見えてくるだけで、ここがどこかは分からない。

いつもの夢か、と僕は浅い眠りの中で思う。

ふいに周囲が真っ白に輝く。次の瞬間、僕は軽く呻いて前肢をかざす。周囲では、朝の陽光が燦々と降り注いでいて、鮮やかな緑の葉群れが目にも痛いほど美しい。

前肢をかざしたまま伸びをすると、爪先が暖かい樹皮に触れる。背中を覆う四枚の羽を軽くゆすって、ゆっくりと空気の中に差し出す。いつもの朝が来た。

僕は、起こした上体をさらに後ろに反らせて自分の羽を確認する。透き通るような朱色の筋が入り組んでいて、夜露のせいでしたととりとした質感を帯びている。すぼめていた房状の触角を開いて青い空の匂いを嗅ぎ、大気の、ゆるやかな動きの中の何かを探す。

そして僕は後肢で立ち上がる。——たしかに僕は洞窟のような暗い場所では何かを食っていた。食っている？ 食べるって、そもそもどういうことだ？

いつものように深い空めがけて、僕は身を投げる。

自分の体の重みを忘れる。

飛び立つときのこの瞬間が僕は好きだ。僕は空気に身をゆだね、空気の動きをつかむまでそのまま漂う。眼下の風景が無為に流れる。ま

たもう一度、ほんの一瞬、ついさっきまで見ていた夢が頭をよぎる。僕は、口器をせわしく動かして、体内に何かを取り込んでいる。おそらく僕は、生まれてこの方、毎夜のようにそんな夢を見ている。

——どうということだ？

そして今日も、僕は夢の詳しい再現を試みてはみたものの、すぐに投げ出す。いつものことで、すでにそれは、遠い昔の漠然とした印象でしかない。

数秒の後、初めて僕は羽を振るわせ、向かうべき方向を探す。

僕はしばらくの間、気ままに飛び回る。僕たちの羽の構造は、他の種と比べてどうやら華奢らしい。直線的な力強い動きは期待できない。遠出も、試みたことはないが難しいと思う。ただ、目的を果たすには十分であり、ほどなく僕は、ごく近くで、強い匂いのようなものが僕を呼び寄せていることに気付く。

仲間が一匹、僕に近づいてくる。彼は僕に向かって腹部の体節を振動させ、空中で出会いの挨拶をする。

彼が僕の背後に急接近する。僕は、ニアミスぎりぎりのところで振り向きざま、彼のアタックを避ける。彼もまた、衝突直前に身を翻し、より高いところへ舞い上がる。すぐさま僕も彼を追いかけ上昇する。どこまでも青くて深い空に落ちていくような錯覚を味わう。そして、二匹がほぼ同じ高さになったところで、顔を直接見合わせる。そんなときはいつも、意識する、しないにせよ、互いの触角が軽く擦り合わされる。浅い快感を僕たちは味わう。

さらに上昇しながら、二度、三度と、僕たちは空中で旋回する。

僕たちは、空中で出会ったときは、仲間であれば誰とでも、いつでも同じことをする。

それは微かに甘い。匂い、というほど確かなものではないけど、互いの体の細かな鱗粉がその場で散って、僕たちを包み込む感触は、しいてたとえるなら甘いと言いたいようなものだ。

空気は暖かく湿っていて、透明な日の光は物の形をくつきりと浮かび上がらせる。僕たちの羽は、ほんの少し角度を変えるたびに、小さ

な輝きを生み出しては消す。僕たちのらせん状のダンスから、ちらちらと細かな乱反射が起きる。周囲にはすでにたくさんの仲間が集まってきたている。

やがて、僕と彼は何事もなかったかのように、すんなりと遠ざかってしまう。もちろん、他の仲間と踊るためだ。僕たちは皆、出会う誰彼おかまいなしにダンスを仕掛け、辺り一帯が無言のまま激しく熱を帯びる。

そんな最中、再び言いようのない感情が僕を襲う。うしろめたさ、あるいは罪悪感、そんな言葉が思い浮かぶ。だけど、それはすぐに消えてしまう。さらに僕は激しく踊り狂う。空気が存在しないと思われた場所に、ふいに虹色の油を流したような輝きが生まれ、そして消える。

上空では、巨大な白い雲が音も立てずに流れている。

彼女たちもだいぶ集まってきたている——僕は気付く。触角が紐のように細く、胴体は逆に僕たちよりも太く短い彼女たちは、ダンスが佳境に入る時分には、必ず近くに来ている。決して、僕たちには加わろうとしない。それでいて、いつまでも飽きることなく、踊っている僕たちを見つめている。

初めの頃、そんな彼女たちに苛々させられたものだった。なぜだか、もどかしくもあった。だけど、目を繰り返すにつれ、僕の彼女たちに対する気分は変わった。僕たちが踊っているときには、彼女たちはそばにいなければならぬ。僕たちのダンスは、彼女たちに見られることによつて、より熱を帯びるから。ときには、やはり軽い疎ましさを覚えることもあるが、誇らしい気分がそれを帳消しにしてくれる。

現に今、僕は彼女たち、いや、そのうちの特定の一匹を望んでいる。

昨日も一昨日も、その前の日も、踊っている最中になぜか何度も目が合う彼女。

その辺りに隠れているのかもしれない、と僕は思う。きっと、そうだ。根拠もなく確信する。こんなことを考え始めるのは、そろそろ時間が来たということにも、否応なく気付かされる。

空気がさらに温まってきた。きつい日差しが表皮をじりじりと焼いている。仲間たちが、一匹、また一匹とダンスの輪から抜け出し始める。風のない中、風に吹き散らされる花びらのように、次第に集団がばらけ始める。

一枚は真つ直ぐに、丈高い夏の叢の中に呑み込まれていく。また一枚は、手近な木の枝に取り付き、そのまま動きを止めてしまうため、樹皮と見分けがつかなくなってしまう。

また、三、四枚は、どれが誰だか目で追うのさえ難しい。行き交い絡まり合っているのを見守っているうちに、次第に小さくなり、ひとつの光の粒になってどこかへ消えてしまう。

僕もまた、呼吸を整えながら、羽の動きを最小限に抑え、空気の動きを読みながら、——彼女を探す。湿度の高い空気はゆつくり、本当にゆつくりと上に向かっていく。その厚みに体を預けて、——僕は急いではいない。

なぜって、そこには理由なんてないから。探して、見つけて、それでどうしようなんて考えていない。あえて理由らしきことを言えば、それは、——食べることに似ているのかもしれない。

ようやく気に入った梢の葉陰に身を潜ませて、僕は枝のくぼみの湿り気に口器を寄せる。小さく尖った口器の奥の、柔らかい舌を伸ばして湿気を吸い取る。朝に、草に溜まった露に舌先を浸すこともある。それ以上を僕は求めていない。

種によつては、食べる必要がある。だけど僕たちは何も食べない。こんな貧弱な口器では何かを咀嚼するなんて難しいし、そもそも呑み込むというのが、どうということなのか分からない。

舌先から目に見えない隙間を伝って、体内に、ほのかに水分が浸み込む。揺れる葉に強い陽光が通過して、僕の白い体が薄い緑に染まっている。僕は気門を開き、よく暖められた湿っぽい空気を吸い込み、吐き出す。

そのまま夕方まで、僕は微睡むことになる。

いつもならば、落日直前に僕たちのダンスが再開される。朝の部よ

りも短い時間ではあるけども、ひとしきり湧き立つように踊った後、今度は一晩中体を休めて、朝を迎える。また飛び立つ。夏の日の光を浴びながら乱舞する。

夏の日を、いつ果てるともなく僕たちは繰り返す。

葉陰の微睡の中でさえ、僕が夢想するのは夏の日差しと湿った微風、どこまでも続く青い空、踊る僕たちの近くに集っている彼女たち。そして彼女。

——いつからいるの？ ふと気付いて、僕は半ば微睡んだまま、彼女に訊ねる。彼女はいつの間にか、触角を伸ばせば触れるほど近くで羽を休めている。

返事の代わりに、彼女はさらに、その重たげな体を寄せてくる。

僕は応じる。

僕は、誰に習ったわけでもないのに、なぜだろう？ 自然に、ほとんど自分の意志ではないくらいに自然さで、彼女の頭胸部の付け根を口器で挟み込む。

僕の腹部が自分でも驚くほど強く反り返る。そして——、その先から何か顔を見せ、彼女の腹部にふれ、なでまわし、やがて探り当てる。彼女もまた然るべき姿勢で——夢ではない。

僕と彼女は初めての交尾をする。

少しづつ日は短くなった。

空の色も薄くなり、それにつれて僕たちのダンスの輪は小さく、動きも緩慢になる。仲間の誰かが一瞬見せた派手な動きも、どこことなく投げやりで、すぐに失速する。もう皆、ただ習慣に引きずられるまま踊りの輪に加わっている。

僕たちが、今の姿でこの世に生を受けて、どれくらいの昼と夜を過ごしたのか分からない。だけど、もうたっぷりと夏を味わった。

そして今、夏の終わりが来つつある。

仲間の数もずいぶん少なくなった。いや、仲間たちだけではない。およそ羽を持ち、飛び交う様々な種がのきなみその数を減らし、すでに、すっかり姿を消してしまった者たちもいる。

以前より澄んだ空気が、しかし外皮にひんやりと冷たい。

僕は彼女と二匹だけで木のうろに籠ることが増えた。ここは、彼女が見つけてきた場所だ。

皆も、こんなふうには、どこかに潜んでいるのかもしれない。あるいは、その生をひっそりと終えたのか。ともあれ、夏の終わりが来つつある。それでいいのだと思う。

僕の、もともと華奢な羽は擦り切れ、あるいは毛羽立ってしまったって、ところどころ穴さえ空いている。

だけど不自由はしていない。

昨日から僕はもうダンスには行っていない。薄暗くて濁った空気の中で、彼女と寄り添って、ただじっとしている。ときに気まぐれに、かさかさした六本の脚と、擦れて汚れてしまった羽を、互いに絡ませ合ったりして、それでなぜか僕は満足している。

どういうわけだか、ここが懐かしい。

僕は湿った薄暗がりの中、彼女のシルエットに目を向ける。

いつからだろう。彼女の腹部は異様に膨らんでいる。ぶよぶよとした感じではなくて、健康的に張りつめている。それでいて、手足は以前よりやせ細っている。まるで、自分の体を食べながら腹部だけが肥え太っている感じだ。

——食べる？

いや、食べるってそういうことなのか、どうなのか。

ただ、それはともあれ、そんな彼女を美しいと思う。あの夏の日差しの下でならともかく、今ここで、樹木の裂け目の奥の、世界で二匹だけの場所では、まるで女王のようにとところを得ている。

僕の視線に気付いたのか、彼女が身を揺すって軽く身構え、僕を見る。「食べるってこと……、」と、ふいに彼女が話し始める。「私、昔

は知っていたんだと思う。」

僕は思わず応える。

「ちようど僕も同じことを考えてた。前からなんとなく思ってたんだけど、あの感覚はなんだろう？　って」

「露を舐めることとは違って、もちろん、」彼女の体がまどうように動き、静止する。

「うん。交尾とも違う」僕は続ける。「だけど、なぜだろう？　ここで、初めてそのことを思い出すなんて」

「たぶんね、これ」彼女は中脚の先で自分の腹部を示す。「聞こえるかな」

促されるまま、僕は後肢の付け根にある耳を、彼女の腹部にあててみる。瞬時に全身がざわめく。僕の体の中心から重いうねりが起こって体内を波のように伝わり、ゆっくりと表皮から外へ抜けていく。

彼女の腹部から伝わる微細な音、彼女自身の生命とは異質の音を聞きながら、僕の目には、小さな無数の粒がぎっしりと詰まっている様子が浮かぶ。そして僕には、——いや、僕にも分かった。その小さな粒の一つひとつの中で、たしかに一つひとつの命が、今にも動き出そうと身構えている。

——闇の中、僕は一匹ではなかった。姿は見えないけど、無数の兄弟姉妹たちが周囲でざわざわと蠢いているのが分かる。手足のない、目も持たない彼ら、彼女らと僕——、ぶつぶつと棘のある小さな肉の塊がその体を蠕動させて、大きな口器を動かしては何かを咀嚼している。濃厚な匂い。そして、連続して体をゆさぶる快感。

これもまた、熱狂。最近まで僕たちの行っていたダンスとは異なるけど、僕たち、いや無数の僕は、何も見ず、何も考えないまま、衝動に身を委ねつつ何かにむしやぶりついている。

しかし何を？

いや、もう分かった。僕には見える。彼女と僕はこの仄暗いうろの

中で寄り添っている。とつくに命は抜け落ちている。時が止まったような静けさのうちに、微動だにしない僕と彼女を邪魔するものは何もない。

しばしの時が経ち、彼女の腹部を食い破り、黒い小さな肉の塊が顔を覗かせる。それは次から次へと続き、僕の体にもその口器でしがみつ き、食らいつく。僕たちは密集し、その手足を持たない体をうねうねとくねらせながら、粘液にまみれ、何かにむしゃぶりついている。何かを咀嚼し嚥下する音だけが暗闇の中に響いている。僕たちを邪魔するものは何もない。

僕たちはこんなふうにして生の営みを始め、こんなふうにして、一生を終える。それは、いつ果てるともなく続く。ちやうど、毎日が繰り返されるように、命は無限に繰り返される。遠い記憶がさざ波のように揺れている。そして、遠い未来もまた――。

(了)